The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	池上禎造先生を悼む
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 2004, 86, p. 7-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69070
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

池上禎造先生を悼む

蜂　矢　真　郷

大阪大学の国語学の初代教授であった池上禎造先生が亡くなられた。昨年一二月一四日（水）、御自宅でのことであった。御遺志からか多くの方には知らされず、一六日（金）の御葬儀は御遺族の他には一二名であった。その後、一九日（月）の朝刊に記事が載った。

池上　禎造さん（いけがみ・ていぞう＝京都大・大阪大名誉教授・国語学）14日、老衰で死去、94歳。通夜と葬儀は近親者のみで済ませた。喪主は次女片岡晴子さん。（朝日新聞）

池上先生は、京都帝国大学卒業の後、同大学副手、第三高等学校講師、同教授、京都大学分校教授、同教養部教授を経て、一九六五年七月、大阪大学文学部教授に着任された。それまで大阪大学には国文学講座のみであったが、新たに国語学講座が作られ、その初代教授としてお出でになった訳である。

私は、この年度、京都大学の一回生で、池上先生の「国語国文学」の講義を受講した（二葉亭四迷の『浮雲』を読むものであった）が、後期は後任の浜田啓介先生（近世文学）の別の内容の講義になった。池上先生は、別に「言学」（国語学概論に当たるか）の講義をされていたが、浜田（啓）先生は後任としてその講義もされた。その年一一月の京都大学国文学会は、池上先生と、その年度限りで定年前に文学部をお辞めになる遠藤嘉基先生とのお二人の講演であった。池上先生の講演は「宛字」についてであった。

その前に、同級生に誘われて一度池上先生の研究室を訪れたことがある。同じ部屋に渡辺実先生がおられた。阪倉篤義先生も同じ部屋であったかどうか、記憶がない。その少し前に、『浮雲』の講義の後で質問したことがあって、その答は別の講義の時にされたということが話題になったが、結局、その答はお聞きすることができなかった。

因みに、京都大学教養部当時のことは、長野甞一氏『学者評判記』（上）［1967・9 有朋堂］に「逸話のないのが特徴だと、みずからもいう。」と書かれている。

大阪大学に移られて後も、大学院の非常勤講師として暫く京都大学に来られたが、それを受講したのは私より上の人ばかりであるので、私は池上先生の授業を京都大学で受けた最も下の学年ということになる。後に、一九八一年一二月に池上先生古稀祝賀会があり、私のところにその案内は来なかったが、先輩のところに来たものを譲り受けて出席した。

私が大学院生の時に、川端善明先生のお勧めで、大阪大学の聴講生として、池上先生の講義を受講したことがある（その手続きのことで、一度だけお宅に伺った）。その時の講義は、「辞書」についてであった。一年間通い続けることはできなかったが、何度かお話する機会があり、幻の上代語スコのことや、語末からの配列のことなどを申し上げたことがある。その年度は、当時大阪女子大学の川端先生が大阪大学に内地留学の時で、大阪大学から三人で京都に帰ったこともあった。

池上先生は、御定年の時、南山大学に移られるとともに、大阪大学名誉教授になられたが、その後、京都大学の規程が改訂されて、定年の時までの在職でなくても年限を満たしていれば名誉教授になれることになり、遡ってその規程改訂が適用されて、京都大学の名誉教授にもなられた。因みに、同じ時に遠藤先生も（他にも適用者は多かったはずであるが、記憶にあるのは蜷川虎三元京都府知事も）名誉教授になられた。

池上先生の御研究は、最初の論文（在学中）の「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」が有名で、有坂秀世氏の研究と合わせて有坂・池上法則（古代日本語における音節結合の法則）と呼ばれる。他にも上代語や音韻についての研究もいろいろあるが、本格的な御著書に古稀の後に出版された『漢語研究の構想』［1984・7 岩波書店］がある。それに対する書評（阪倉氏「文学」53－3［1985・3］、山田俊雄氏「国語と国文学」62－6［1985・6］、佐藤喜代治氏「国語学」141［1985・6］）を見てもよくわかるが、漢語に決してとどまらない深く広い内容が述べられている。文字・表記に関する研究はこの著書に収められていないものも多く、近世語・近代語についてのものや、言語生活・言語生活史についてのものも多くある（これらには、国語審議会委員を四期八年務められたので、それに関連するものもある）。「中古文と接続詞」や「語中のハ行音」は、『論集日本語研究』（有精堂）に収録されている。今読んでも新しいことが多いと、葬儀で一緒になった人と話したことである。

そう言えば、古稀の会での講演（「元気」その後）など、論文になっていないことも多いと思われる。もっと多くのことを伺っておけばよかったと悔やまれることである。今は、御冥福をお祈りするばかりである。

なお、国語学会改め日本語学会では、学会創設に尽力され、評議員・理事を務められて、名誉会員になられた池上先生の追悼特集を、「日本語の研究」2－4（「国語学」通巻217号）［2006・10］に「池上禎造名誉会員 追悼」として掲載する予定である。

―本学大学院教授―